

佐藤 朋子という“時間”

東京藝術大学美術学部教育研究助手 巖谷睦月

はじめて佐藤朋子の作品を実際に見たとき強く感じたのは、そこに層として積み重なった“時間”が存在している、ということだった。彼女はさまざまなモチーフを通して“時間”とともにある。

かつて、佐藤はヨーロッパの強制収容所の風景を描いた。はじめてそこを訪れたとき、『この悲惨な場所は何と美しいのか』と思ったという彼女の描いたその風景は、いつも不思議な静けさをたたえている。それは、2001年から2002年にかけて描かれた《川のある風景》⁽¹⁾のシリーズです。すでに見られた静寂をひきつぎながら、さらに深まっていく。

「強制収容所」という場所は、その名を耳にするだけで重く傷ましい歴史を想像させるが、佐藤の作品は悲痛な叫びや、たれこめる雲のような晴れることのない後悔をことさらに描きだすものではない。彼女の筆の前で、惨劇は流れた時間の一部となる。その場所を過ぎさったあらゆるものを彼女は静かに見つめている。そこに沈殿し、層のように重なる“時間”を風景の中に見出すかのように。描くために使われる色が変わり、モチーフを描きだす筆の簡潔さが強まって常にも画面は静謐だ。しかし静止してはいない。

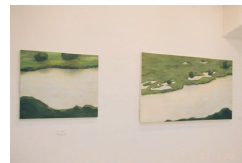
おそらく、佐藤の心をとらえるのはいつも“時間”のありようなのだろう。2004年の《物語のある風景》⁽²⁾はそれを伝えている。風景の孕む物語とは時間の堆積である。風景を『開かれた物語』と呼んだ彼女はおそらく、自分もまたその内部に組みこまれていることにどこかで気づいていたのだろう。彼女は自らの時間もまた、堆積する時間の一部として扱った。その場所を見つめ、描いている自分もまた、時間の層の中にある。その感覚は、描いている自らに流れる“時間”を描く、のちの作品へと繋がっていくように見える。

風景を描きつづけることに限界を感じたとき、佐藤が出会ったのは新たなモチーフだった。そのきっかけは、古典技法の習得とカラヴァッジョの絵画によってもたらされる。

彼女がその技法の習得にあたって選んだ主題は「布」であった。カラヴァッジョが聖人の肌を覆うために描いた布は佐藤の手でとりだされ、「布」という独立したモチーフに昇華する。しっとりと重みのある赤色の布は、彼女の画業が新しいステージへと進んだことを告げるために開か



(3)「untitled」
油彩・キャンバス、2010



(1)「川のある風景」
油彩・キャンバス、2002



(2)「物語のある風景」
油彩・キャンバス、2004

れる緞帳のごとくある⁽³⁾。奥行きのある色彩を得たいと考えて学んだ古典技法は佐藤に、複数の層の重なりによって油彩画がかたちづくられるということをはっきりと知らせた。ひとつひとつの層は完成のための作業の工程を意味する。それを重ねていくことで、彼女の“描く時間”は絵画の構造そのものとして提示されるようになった。

近作まで続くこの「布」をモチーフとしたシリーズは一見、抽象画のように感じられるがゆえに、それまでの作品とは異なった印象を与える。

だが、そこにはあくまでも描く対象としての「布」が存在しており、それを通して彼女はまたしても堆積する“時間”を描いている。いや、もはや描くことによって画面の上に“時間”の層を堆積させているのだ。そこでは描くことそのものが物語となる。

「強制収容所」はそれ自体が強い意味を持つ（あるいは、見る者がそれに強い意味を持たせてしまう）モチーフであったのに対し、「布」はきわめてニュートラルなモチーフである。描くことそのものが物語となり、作品となるとき、モチーフに意味が必要でなくなるのは、当然と言えば当然だろう。そのかわりに布の襞は豊かな表情を持ち、画面に奥行きをもたらす。襞の含む陰影は画面にかすかな動きを与えている。

近作において、描かれた布は一枚の膜のような透明度の高い油彩絵具の層を透かして見えている。布を描くという行為だけですでに成り立っている物語は、あえてその上に重ねられる色彩の層と、そこに残される紋様によっていっそう華やかなものとなる。この紋様は佐藤自身の指によって残される痕跡であり、ひとつひとつの痕が時間の堆積の印でもあるのだ。

佐藤の絵画はそこに堆積する時間という物語を描くことから、描く時間を堆積させる物語へと姿を変えていった。だが、タイトルを与えられていない「布」のシリーズは決して、彼女個人の閉じた物語ではない。画枠の中に全ておさめることの決していない「布」は、この四角い画面の外側にある時間をも暗示している。佐藤の提示する物語は、より大きな物語——この世界のあらゆるものの上に流れる時間——の一部なのである。

2015年9月